

Title	松山先生を憶心
Author(s)	音代, 節雄
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 109-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88773
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

松山先生を憶ふ

音 代 節 雄

懷德堂は近年大厄に遇つてゐる。變には、西村博士の逝去があつて、まだ悲しみが消えぬまに、永田理事長は議會開院中東京に於て突として逝かれ、今また、松山教授は長日にわたる惱の後不歸の客となられた。

もうかれこれ七年程前の事である。懷德堂といふものを知らなかつた自分は、或る日曜の朝、商品陳列所の構内を散策してゐた。氣候は秋だつたとおもう。開かれてゐる窓の外から目にどまつたのは、紋附姿の講師であつた。後から思ふと、これは論語朝講であつたのだ。それが松山先生であつたことに違はない。是か最初の松山先生の印象であつた。

後間もなく懷德堂に入つた時、先生は大學衍義、近思錄、韜軒語を講せられてゐた、漢學に殆んど智識のなかつた自分は、別天地へ來た様であつたが、追々とわかつて來る。吾々晝働いてゐるものにとつて、夜間はともすれば疲勞が出て、近思錄などは時々ねむけを催すこともあつた。併し但一つ清々しき氣持で講義を聽く事の出來たのは、日曜の朝講である。朝の一時間の講義は、身心を爽快にして、先生の講義に傾聽してゐると、自ら冥想に耽けるのである。一週のうちに、夜晝を通じて自分の心を最も落付かして、純眞澄透せしむるものは、此日曜朝講の一時間である。好んで此日は枚方から出掛け

たのであつたが、今はもう先生の悠容たる講義振りを見られなくなつてしまつたのも悲しい。人格識見共に間然するまゝな先生温厚其物の如き先生孜孜として研究に没頭された先生、懷徳堂の

發達に終始盡された先生、今やなし。先生を慕ふ心は甚だ切である。せめて博士論文北宋五子哲學の速かに公刊される日を待ちたい。

松山先生の大なる賜

小松熊之助

日曜朝講後正午迄の學習は小生が頗利益を受けたと信じて居る、初小生は松山先生から道をこそ聞け、知らぬ字を教へて戴くなどはあまり期待すべきことゝも思はなかつたが、然し小生の訓話癖と質問病とはいつのか先生を字引教師のやうに待遇したした、先生の寛大なる之に對して少しも御厭ひなく、寺小屋の師匠が『いろは』を教へるにも増した御面倒を御覽下さつたのである、此無遠慮は定日講義の筈に於てもそうであつたが、

主に上記日曜朝講後の學習に於て行はれた、御蔭様で多少讀書力が付いた様な氣がしはじめると、少し書物を読んで見る氣が起り、書物を少し手に掛けると道を知るに於て多少の利益はあつたと確信する、小生が先生より受けたる大なる賜といふのは此『字を教はつたこと』である、固より先生の全人格的御教育を受けることによりて大に益する所があつたことは今更言ふまでもないことであるが、先生が字引教師に爲つて